

1. 京都薬科大学

| | | |
|-------|---|------|
| テーマ | 市民組織と協働で行う地域児童を対象とした理科実験講座の取り組み ～身近な夏の不思議体験 2025 イン 山科～ | |
| 発表代表者 | 林 美沙:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 | |
| 連名発表者 | 高尾 郁子:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 高田 哲也:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 徳山 友紀:京都薬科大学 学生実習支援センター 助手 金瀬 薫:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 岩崎 宏樹:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 石川 誠司:京都薬科大学 学生実習支援センター 講師 平山 恵津子:京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 木村 徹:京都薬科大学 学生実習支援センター 准教授 山口 貴:京都薬科大学 企画・広報課 久保 亜未:京都薬科大学 企画・広報課 武上 茂彦:京都薬科大学 学生実習支援センター 教授 | |
| キーワード | 地域連携活動 | 市民協働 |
| | 科学体験 | 理科実験 |
| 発表の概要 | <p>京都薬科大学では 2011 年度より、地域連携活動の一環として山科区の小学生を対象に理科実験講座を開催している。本講座は身近な科学現象を題材に、実験を通して理科への興味を引き出し、その関心を継続させることを目的とする。さらに、市民組織と協働し地域とのつながりを深めながら運営している。</p> <p>2025 年度は「水」をテーマに、「手でつまんで持てる水！容器がいらない水を作ろう」、「水が消えた！？水を吸う魔法の粉」の二つの実験を行った。対象は小学 4～6 年生で午前・午後の 2 回に分けて、計 94 名が参加した。市民組織の方々にはサポートスタッフとして児童の補助や安全管理を担っていただいた。</p> <p>本発表では、サポートスタッフと児童の反応を中心に具体的な取り組みと支援内容を報告し、地域連携活動における科学教育の成果と課題について考察する。</p> | |

2. 京都外国語大学・京都外国語短期大学

| | | |
|-------|---|---------------|
| テーマ | 大学から地域社会へ:コミュニティ通訳認知度の壁を越え、大学の社会的役割～情報共有と実践課題～ | |
| 発表代表者 | 佐藤 晶子:京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 教授 | |
| 連名発表者 | 河野 弘美:京都外国語短期大学 キャリア英語科 教授 戸田 行彦:京都外国語大学 英米語学科 講師 アイシュフリヤ・スガンディ:京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 准教授 | |
| キーワード | コミュニケーション | 大学一小中高等学校との協働 |
| | 地域連携モデル | 人材育成 |
| 発表の概要 | <p>第 29、30 回 FD フォーラムの発表を通じ、本学のコミュニケーション教育は着実に発展してきた。第 30 回では、認知度向上活動と 6 領域の現状把握を報告し、2025 年度はその成果を基盤に、更なるコミュニケーションへの正しい知識共有、地域連携への方策、また実践がうみ出す教育的效果の可能性、大学の社会的役割を検討する試みを行った。</p> <p>本発表では、それらの試みのうち以下の 3 つの調査結果に焦点をあて分析を報告する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 履修学生へのアンケート:学習効果とキャリア意識の変容 学内教職員へのアンケート:コミュニケーション教育の認知度と評価 公立中学校・高等学校教員へのアンケート:地域の多文化共生教育のニーズと連携可能性 <p>大学のコミュニケーション育成プログラムと初等中等教育機関との連携により、大学の役割の可能性が見えてくる。本発表では、大学の地域社会における役割と、持続可能な教育連携モデルの構築と課題について報告する。</p> | |

3. 京都精華大学

| | | |
|-------|---|------|
| テーマ | 司書課程「図書館サービス特論」授業内の地域連携 ～一乗寺地域イベント運営と岩倉図書館サイン作成～ | |
| 発表代表者 | 木川田 朱美 京都精華大学 国際文化学部 特別任用准教授 | |
| 連名発表者 | 佐々木 美緒:京都精華大学 国際文化学部 准教授 | |
| キーワード | 司書課程 | 地域連携 |
| | 図書館 | PBL |
| 発表の概要 | <p>本発表では、京都精華大学司書課程での地域連携を伴うPBL授業の実践について述べる。授業「図書館サービス特論」では2023年度より下記2件の地域連携を授業内で行っている：</p> <p>①岩倉図書館サイン作成：京都市岩倉図書館との連携で、児童コーナーの棚差しサインを学生が制作した。ユニバーサルデザインや多様性について学びつつ、公共広報物に適切な表現を検討した。</p> <p>②「本でつなぐ一乗寺」：一乗寺地域の私設図書館「みんなの図書館 momokuri」と書店「恵文社一乗寺店」「一乗寺ブックアパートメント」との共同企画である。学生は地域や利用者を調査したうえで連携書店で選書ツアーを行い、本の広報媒体(POP、冊)を作成して展示した。</p> <p>これらの実践は学生に地域社会と協働する実践的学びを提供し、地域図書館の改善にも寄与した。一方で、資格課程の選択科目としての限界や成果物管理などの課題も明らかになった。今後も地域に根ざした司書養成を目指し、連携体制の強化と教育改善を図る。</p> | |

4. 龍谷大学

| | | |
|-------|--|-------------|
| テーマ | 学生参画に携わる学生スタッフの活動に対する意識調査 ～他者との協働に必要な力の育成を目的として～ | |
| 発表代表者 | 小林 珠子：龍谷大学 学修支援・教育開発センター 専門員 | |
| 連名発表者 | | |
| キーワード | 学生スタッフ | 学生参画 |
| | 活動に対する意識 | コミュニケーション能力 |
| 発表の概要 | <p>龍谷大学では、半数近くの部署において学生スタッフがさまざまな活動に従事している。本研究は、学生スタッフがその活動に何を期待し応募したのか、活動を通してどのような成長を実感し、困難を覚えているのかなどについてアンケート調査を実施し、学生スタッフがその活動を通じ、より多くの学びや成長を得ることのできる研修プログラムを開発することを目的としたものである。</p> <p>本発表では、学生スタッフを対象に実施したアンケート調査の結果について報告する。調査の結果、学生スタッフの多くはコミュニケーション能力に関心を寄せていることが明らかとなった。この結果を踏まえ、学生スタッフが教職員や他学部・他学年の学生と協働する際に必要な力を育成するための育成プログラム(研修)についても報告する。</p> | |

5. 同志社女子大学

| | | |
|-------|--|----------|
| テーマ | 学部横断型アプローチによる新たな知の創出:学内助成研究(三期・2017-2025)を通じた教育デザインに関する総合的考察 | |
| 発表代表者 | 成橋 和正:同志社女子大学 薬学部 医療薬学科 教授 | |
| 連名発表者 | 今井 由美子:同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科 教授 ROGERS, Lisa:同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科 教授 佐伯 林規江:同志社女子大学 学芸学部 国際教養学科 教授 橋本 秀実:同志社女子大学 看護部看護学科 准教授 倉橋 優子:同志社女子大学 生活科学部 食物栄養科学科 准教授 若本 夏美:同志社女子大学 表象文化学部 特別任用教授 高橋 玲:同志社女子大学 名誉教授 飯田 毅:同志社女子大学 学芸学部 国際教養学科 特別任用教授 | |
| キーワード | 学部横断型アプローチ | 教育デザイン |
| | 学部間教員連携 | 研究プロジェクト |
| 発表の概要 | <p>同志社女子大学は他学部教員間の交流が活発で学部横断型研究を推進する助成制度もある。「本学の教育理念及び Vision 150 を活かした共通英語教育開発のための基礎研究」(2017~2019 年度)では、教育理念に相応しい共通英語教材の開発を目指し、英語力・学習方略・学習動機の調査と分析を行った。「Vision 150 を活かす遠隔授業と対面授業についての総合的研究:高度で質の高い授業の探求」(2021~2023 年度)では、6 学部の学生を対象に遠隔授業と対面授業に関する量的・質的調査を行い、分析結果に基づき各学科の理想的な授業形態を検討した。「女子大学におけるウェルネスとエンパワーメントに関する研究」(2025 年度)では、学生のストレスと要因を質的・量的に把握し、ウェルネスの実態解明と支援の方向性を検討している。本発表では、これら学部横断型アプローチによる教育デザイン研究を総括し今後の展望を考察する。</p> | |

6. 京都芸術大学

| | | |
|-------|--|------|
| テーマ | 学生参画型 FD 研修を通じた教育改善の実践報告 | |
| 発表代表者 | 竹内 里実:京都芸術大学 学習支援・教育開発課 課長 | |
| 連名発表者 | 今井 尚美:京都芸術大学 学習支援・教育開発課 吉川 春佳:京都芸術大学 学習支援・教育開発課 荻野 愛里沙:京都芸術大学 学習支援・教育開発課 | |
| キーワード | カリキュラム改善 | 授業改善 |
| | 参画学生 | |
| 発表の概要 | <p>京都芸術大学では、2021 年度に FD 研修の体系化を行い、「教育」「学生支援」「大学運営」の 3 領域と、「フェーズⅠ(導入)」「フェーズⅡ(実践)」「フェーズⅢ(支援)」の 3 段階に整理した FD・SD 研修を実施している。</p> <p>本発表では、2022 年度から新たに取り組んだ学生参画型 FD 研修について実践報告を行い、学生参画で行うことによりどのような成果が得られたか、また、授業レベルの改善や、カリキュラムレベルの改善にどのように活かされたかを共有する。また、ポスター発表の様子など、芸術大学の学生ならではの研修成果についても紹介したい。</p> | |

7. 京都産業大学

| | | |
|-------|---|-----------|
| テーマ | 学生スタッフ「LINK」主導による異文化交流イベントの実践報告 ～グローバルコンピテンシーを育み、留学生と学生を結ぶ場づくり～ | |
| 発表代表者 | 杉江 昌子:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(グローバルコモンズ 学習支援担当) 職員 | |
| 連名発表者 | 入江 莉帆:京都産業大学 外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年 野村 史:京都産業大学 外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年 吉田 墓:京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年 レイシー アンドレア:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当 ハフマン 美亜:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当 | |
| キーワード | 学生スタッフ | 異文化交流イベント |
| | 準正課・課外 | 主体的な学び |
| 発表の概要 | 京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、2021年の活動開始から5年目を迎えた現在も、準正課の主体的な学習活動として語学や異文化交流のイベントを学生主導で継続して実施している。「学内にグローバルマインドを広げること」をミッションに、参加者が外国語や異文化を楽しく学びあう場を提供してきた。毎年入れ替わるメンバーの人数や専門、参加者のニーズに応じて活動内容を進化させている。学生が主体的に関わる中で得られる成長実感には、語学力、異文化理解力、課題解決力、貢献意識などのグローバルコンピテンシーの成長がみられる。本発表では、留学生との親睦を図る異文化交流イベントを取り上げ、企画から実施までのプロセスやメンバー間の協働の様子を学生の声で紹介する。さらに、活動を通して学生がどのような行動や思いの変化を遂げたのか、実践から得た気づきと成長を学生の視点から伝える。 | |

8. 京都華頂大学・華頂短期大学

| | | |
|-------|--|--------|
| テーマ | 学びのユニバーサルデザインをめざして ～ストレス評価に基づく環境改善の取り組み～ | |
| 発表代表者 | 根岸 裕子:京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(食物栄養学科) 教授 | |
| 連名発表者 | 上田 有里奈:京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(生活情報学科)准教授 柴田 精一:京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(幼児教育学科)講師 高岡 理恵:京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(幼児教育学科・介護専攻科)教授 | |
| キーワード | 学びのユニバーサルデザイン | 学生の多様化 |
| | 精神的健康 | 非言語的関与 |
| 発表の概要 | 学生の精神的健康度を可視化し、大学におけるユニバーサルデザインの改善に活かすことを目的に、大学および短期大学の学生を対象にKessler 心理的ストレス尺度(K10)を用いた調査を実施した。K10スコアに基づき空間利用や支援制度の認知、相談環境を比較した結果、「一人で静かに過ごせる空間」や「交流と快適性の調和」を重視する傾向がストレスの高い学生に多くみられた。また、静穏な学習空間の確保、制度的支援の認知、情報アクセスのしやすさや教材提示のわかりやすさなど、複数の要素が精神的健康度と関係していることが示唆された。学生の多様化が進む中、モバイル端末での情報設計、オフィスアワーの周知、教職員の非言語的な関与、AIチャットボットの活用などが、より安心して学べる環境づくりに寄与する可能性がある。こうした視点は、支援の到達性と大学の質保証を高める一助となることが期待される。 | |

9. 京都橘大学

| | | |
|-------|--|-------------|
| テーマ | 共に歩む課題解決 | |
| 発表代表者 | 山本 博:京都橘大学 情報システム課・課長 | |
| 連名発表者 | | |
| キーワード | 伴走支援 | ほどく・共感する |
| | 良質な問い合わせ | 文化人類学的アプローチ |
| 発表の概要 | <p>「パフォーマンスは関係性から生まれる」という考えのもと、教務課との対話から始まった伴走による課題解決の試みは、学生支援や人事課など計7課へと広がった。伴走を通じて職員は自走し、これまでできなかったことに挑戦できる効力感を得た。これにより、苦手分野でもモチベーションが高まり、取り組みサイクルが加速している。私たちは「つくる・届ける」にとどまらず、「ほどく・共感する」ことから始めることで、課題を対話的に整理し、最適な設計を模索し続けている。このプロセスでAIを多用しその効用を実感したが、取り組みの結果の質は、いかに良質な問い合わせができるかによって大きく左右されることにも気付かされた。この経験から、文化人類学的視点を取り入れた研修開発に至っている。本発表では、この一連のプロセスを紹介する。</p> | |

10. 同志社大学

| | | |
|-------|--|-----------|
| テーマ | 大学院生のアカデミックスキルセミナー補助活動から見たプレ FD としての可能性 | |
| 発表代表者 | 趙 智英:同志社大学 学習支援・教育開発センター 助教 | |
| 連名発表者 | 日比野 希歩:同志社大学 大学院文学研究科 博士後期課程 3年生 山本 尚平:同志社大学 大学院法学研究科 博士後期課程 4年生 浅野 けやき:同志社大学 大学院神学研究科 博士後期課程 3年生 大谷 紗也加:同志社大学 学習支援・教育開発センター 特定業務職員 藤井 友紀:同志社大学 学習支援・教育開発センター 特定業務職員 | |
| キーワード | アカデミックスキルセミナー | アカデミックスキル |
| | プレ FD | 大学院生 |
| 発表の概要 | <p>同志社大学では、大学での学びに必要なアカデミックスキルを身につけることを目的としたアカデミックスキルセミナー(以下、セミナー)を実施している。一部のセミナーは大学院生が補助スタッフとして登壇し、講師とともに進行を担う。セミナーの補助活動を行った大学院生からは、活動を通して自身のアカデミックスキルの再認識や、教授法への理解の深化があったとの声が寄せられ、これらの実践を通してセミナーの補助活動が単なるサポートにとどまらず、教育者としての視点を育むプレ FD の場として機能している可能性が示唆される。本発表では、LA によるセミナー補助活動の具体的な実践内容を紹介し、プレ FD としての効果について報告する。</p> | |

11. 京都産業大学

| | | |
|-------|---|-----------|
| テーマ | ファシリテーションの DX ～作りながら考えるファシリテーションの可能性～ | |
| 発表代表者 | 澤 宏司:産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房)嘱託職員 | |
| 連名発表者 | 大島 和美:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房)特定専門員 安達 晃輝:京都産業大学 情報理工学部 3年生 今村 涌亮:京都産業大学 法学部 3年生 貝増 祐斗:京都産業大学 経営学部 2年生 川上 雄大:京都産業大学 理学部 2年生 北浦 慶人:京都産業大学 文化学部 2年生 金城 昂汰:京都産業大学 情報理工学部 1年生 神谷 拓海:京都産業大学 経済学部 4年生 重野 聖空:京都産業大学 経済学部 4年生 田丸 遼人:京都産業大学 情報理工学部 3年生 櫻岡 翼:京都産業大学 文化学部 2年生 山下 達也:京都産業大学 情報理工学部 2年生 矢尾 衣織:京都産業大学 文化学部 2年生 | |
| キーワード | ファシリテーション | 学生ファシリテータ |
| | 授業支援 | DX |
| 発表の概要 | 京都産業大学 教育支援研究開発センター F 工房は、ファシリテーションを全学に広げるための拠点である。その F 工房の「学生ファシリテータ(学ファシ)」は、文・理の多様な学部から集まった、学生の主体的な学びを支援する学生ボランティアスタッフである。学ファシのチーム「FCDX」は、ファシリテーションにおける DX の可能性を模索すべく、2025 年夏から漸次的に組織された。現在は、リアルタイムの音声・画像認識による対話支援、近距離無線通信による入退室支援など、3~4 のプロジェクトが進行している。FCDX は技術開発のみが目標ではなく、その開発過程でのファシリテーション自体の洞察、また技術やプログラミングになじみが少ない学生のプログラミングへの啓発など、多様な波及効果が期待される。本報告では現在進行中のプロジェクトの状況を、その課題とともに具体的に示す。 | |

12. 龍谷大学

| | | |
|-------|---|------------|
| テーマ | “学生主体”の支援が生み出す学び 龍谷大学ライティングサポートセンターによる相談対応と学生スタッフに及ぼす効果 | |
| 発表代表者 | 島村 健司:龍谷大学 ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザー | |
| 連名発表者 | 萩野 翔太:龍谷大学 文学研究科 仏教学専攻 博士後期課程 4年生 神林 声:龍谷大学 文学研究科 日本史学専攻 博士後期課程 4年生 笛原 有貴:龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 2年生 | |
| キーワード | ライティングセンター | スチューデントジョブ |
| | アカデミック・ライティング | 学生参画 |
| 発表の概要 | <p>龍谷大学ライティングサポートセンターでは、大学院生のライティングチューターが中心となり、龍谷大学生のレポートや卒業論文など文章作成にかんする相談を受けつけている。相談対応では、答えを教えるのではなく、相談者の考えを尊重し、課題解決の方向性を共に探る姿勢を大切にしている。また、当センターでは、ライティングチューターに対する支援として、定期的な研修のほか、学期ごとにループリックを活用してチューターが自己評価を行い、自身のチューターとしての成長度や大学院生としての成長を可視化している。本ポスターセッションでは、学習支援およびスチューデントジョブの2つの観点から、具体的な取り組みとその成果について紹介する。定量的なデータだけでなく、相談者アンケートおよびチューター成長度評価の自由記述の内容を通して、相談者とチューターそれぞれの視点に目を向け、支援のあり方とその効果の一端を複眼的に捉える試みである。</p> | |

13. 同志社女子大学

| | | |
|-------|---|------|
| テーマ | 薬学教育における主体的学修基盤の形成～アカデミックスキル演習の実践～ | |
| 発表代表者 | 小谷 晶子:同志社女子大学 薬学部 特任教授 | |
| 連名発表者 | 西村 亜佐子:同志社女子大学 薬学部 特任助教 山内 雄二:同志社女子大学 薬学部 准教授 根木 滋:同志社女子大学 薬学部 教授 芝田 信人:同志社女子大学 薬学部 教授 | |
| キーワード | アカデミックスキル | 薬学教育 |
| | 主体的学修基盤 | |
| 発表の概要 | <p>本学では 2024 年度新カリキュラムより、大学における主体的学修を早期に定着させることを目的として、1 年次春学期に「アカデミックスキル演習」を導入した。薬学は基礎系から医療系に及ぶ広範な学修が求められる学問領域であり、薬剤師として社会に貢献するためには幅広い知識と自己調整型学修力が不可欠である。本科目では、与えられた課題に対して自ら主体的に行動し探究する姿勢を身につけることを重視し、その基盤形成を支援することを狙いとしている。授業は、研究倫理を含む学修導入、情報リテラシー、ストレスマネージメント、ヘルスリテラシー、アサーティブコミュニケーションなどの横断的スキルに加え、物理・化学・生物の基礎系科目の効果的な学び方、レポート作成などのライティング技法、メタ認知力の育成で構成される。本発表では、授業設計の意図、実践内容、学生の反応に加え、今後の展望について報告する。</p> | |

14. 京都女子大学

| | | |
|-------|--|-----------|
| テーマ | 「コモロウプロジェクト」1年目の実践 ～学生たちが主役のラーニングコモンズ運営を目指して～ | |
| 発表代表者 | 桂 まに子：京都女子大学 発達教育学部教育学科 講師 | |
| 連名発表者 | | |
| キーワード | 大学図書館 | ラーニングコモンズ |
| | 学生協働 | 主体的な学び |
| 発表の概要 | <p>2017年に開館した本学の新図書館にはアクティブ・ラーニングコモンズとメディアコモンズという2種類の学習空間があるが、残念ながらこれらの空間の存在や使い方を知っている学生は少数派である。ラーニングコモンズの運営を一から考えるために、2025年6月に大学図書館の学生ボランティア「図書活」と学生サークル「京都女子大学図書館学研究会」に声をかけ、学生たちが主体的に図書館のコモンズ活用を考えていく「コモロウプロジェクト」を立ち上げた。</p> <p>本発表では、前期5名、後期10名が参加した初年度の活動内容を紹介する（ラーニングコモンズ内にコモンズブースを常設、学外の学生協働サミットに参加・発表・学生交流、京女生のニーズに応えるデータベース検索体験会を開催）。ラーニングコモンズ活性化のための実践は始まったばかりである。今年度の成果と課題をふまえ、学生と教職員が協働して取り組める目標を設定し、次年度の活動につなげていきたい。</p> | |

15. 京都産業大学

| | | |
|-------|--|---------------------|
| テーマ | 準正課・課外をする学生の成長実感調査に向けた試行的取り組み：質問紙一体型自計式フィードバックシート(SSG-7)の実施事例 | |
| 発表代表者 | 山野 洋一：都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員 | |
| 連名発表者 | 梶浦 真琴：京都産業大学 文化学部 4年生 伊藤 未侑：京都産業大学 文化学部 4年生 笹中 紳之介：都産業大学 文化学部 4年生 磐貝 瑛里：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員 杉江 芳隆：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員 津野 十紫：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 事務長補佐 山内 尚子：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 事務長 三田 貴：京都産業大学 教育支援研究開発センター 副センター長 佐藤 賢一：京都産業大学 教育支援研究開発センター センター長 | |
| キーワード | 準正課・課外 | 質問紙一体型自計式フィードバックシート |
| | 成長実感とエンゲージメント | 教員・職員・学生によるFD/SD |
| 発表の概要 | <p>筆者らは準正課などの課外活動をする学生の成長実感を測定する尺度(SSG-25)を活用し、教育実践での展開を行ってきた。さらに、本センターは、短縮版7項目成長実感尺度(SSG-7)、および短縮版の周囲の関与・学生生活の満足感・健康習慣尺度を活用し、教育実践での展開を目指している。SSG-7と関連尺度は全国2310名の大学生を対象にした調査で、信頼性・妥当性が確認されており、質問紙とフィードバックシートが一体化した自計式になっていることが特徴である。今回は試行的に準正課・課外活動等を行う大学生3名に使用した。その結果、「自身の状況を把握できる」等の内省報告を得た。一方で、詳細な成長実感や周囲の関与の程度の把握にはSSG-25が優れている。SSG-25とSSG-7を使い分けることで、目的や状況に合わせたアセスメントが可能となる。シートの使用感の詳細は当事者の学生から報告を行う。</p> | |

16. 京都外国語大学

| | | |
|-------|--|-------|
| テーマ | 外国人旅行者へのフィールド調査を通じた「多様な利用者にやさしい駅づくり」 ～JR 西日本と大学生による産学連携の実践～ | |
| 発表代表者 | 岩田 英以子：京都外国語大学 グローバル観光学科 准教授 | |
| 連名発表者 | 北村 桃子：京都外国語大学 グローバル観光学科 2年生 吉本 琢磨：京都外国語大学 グローバル観光学科 2年生 渡邊 のぞ美：京都外国語大学 グローバル観光学科 2年生 HNIN WAI AUNG：京都外国語大学 グローバル観光学科 2年生 | |
| キーワード | フィールド調査 | 実践的学び |
| キーワード | 産学連携 | 異文化理解 |
| 発表の概要 | <p>本発表では、JR 西日本京都統括駅と京都外国語大学グローバル観光学科による産学連携プロジェクト「外国人観光客にやさしい駅づくりプロジェクト」の実践を紹介する。学生が“日本語や日本の文化に不慣れな旅行者”の視点から、駅の現場における課題を多面的に捉え、多言語（英語・韓国語・中国語）によるアンケートやインタビューを通じて収集・分析し、改善案を提案・実施する取組である。現場の課題に対し、学生が企業担当者と連携しながら実践的に課題解決を行う点が特徴である。本活動を通じて、学生は京都を訪れる外国人旅行者と直接対話し、大学で培った観光英語や異文化理解の知識を生かすことで、学びを社会に還元する実践的な機会を得た。本発表では、その実践の経過と成果を共有する。</p> | |

17. 京都文教大学

| | | |
|-------|--|------------|
| テーマ | T グループで学生は何を体�験し、何を学んだのか ～京都文教大学実践社会学科「つなぐラボ演習Ⅰ」の授業実践～ | |
| 発表代表者 | 中西 勝彦：京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 助教 | |
| 連名発表者 | 寺田 あゆみ：京都文教大学 総合社会学部 総合社会学科 4年生 北尾 千夏：京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生 山下 遥叶：京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生 | |
| キーワード | T グループ | 人間関係トレーニング |
| キーワード | ファシリテーション | 授業実践 |
| 発表の概要 | <p>京都文教大学総合社会学部実践社会学科（以下、本学科）では、プロジェクト活動を中心とした様々な「実践」を通じて、社会課題の解決に寄与する人材の育成を目指している。本学科では、プロジェクト活動に必要な6つのスキルを伸ばすための科目を「プロジェクト・スキル科目」としてカリキュラムに位置づけている。そのうち、リーダーシップやファシリテーションなど、対人コミュニケーションに関わるスキルの伸長を目的とした「つなぐラボ演習Ⅰ」では、人間関係における関係的過程を学ぶために授業内でT グループを行っている。T グループ（T はトレーニングの略）は、参加者がグループで起こる「今-ここ」の人間関係のプロセスに気づき、その体験から学ぶことを目的とした非構成的なグループ活動である。本発表では、T グループに参加した学生が、T グループでどのような経験をし、何を学んだのかを報告する。</p> | |

18. 龍谷大学

| | | |
|-------|---|--------|
| テーマ | さまざまな授業形式に対応した授業観察ポイント一覧とループリックの検討～授業観察学生の視点から～ | |
| 発表代表者 | 寺川 史朗:龍谷大学 法学部 教授 | |
| 連名発表者 | 小林 珠子:龍谷大学 学修支援・教育開発センター 専門員 大西 春叶:龍谷大学 文学研究科 東洋史学専攻 修士課程 1年生 中道 彩晴:龍谷大学 経済学部 現代経済学科 2年生 | |
| キーワード | 授業観察 | 教育改善 |
| | 学生参画 | ループリック |
| 発表の概要 | <p>龍谷大学では、2021・2022 年度に「学生による授業観察」プロジェクトを実施し、その成果を基に 2023 年度から「学生による授業観察に基づく授業支援」を全学で推進している。2025 年度は取り組み 3 年目となる。授業観察に際し、観察学生は事前に授業担当者と打ち合わせを行い観察のポイントを聞き取るとともに「授業観察ポイント一覧表(以下、一覧表)」を用いて授業観察を行う。2025 年度は「一覧表」をもとに、ループリックを作成した。「一覧表」とループリックはともにさまざまな授業形式に対応できる内容になっているが、講義形式を想定した項目が多く含まれている。授業観察では、AL 形式の授業を観察する機会もある。また今後はオンライン授業を観察対象とする予定である。本発表では、講義形式以外の授業観察において有用な「一覧表」およびループリック作成に向け必要な視点・項目について観察学生と検討した結果について報告する。</p> | |

19. 京都産業大学

| | | |
|-------|--|---------|
| テーマ | 学生スタッフ「LINK」主導の多言語イベント実践報告 ～言語学習を目的とした学生主体の準正課活動の事例として～ | |
| 発表代表者 | ハフマン 美亜:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(グローバルコモンズ 学習支援担当)職員 | |
| 連名発表者 | 和田 潤青:京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ロシア語専攻 4年 吉田 墓:京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年 小嶋 智廣:京都産業大学 法学部 法律学科 3年 レイシー アンドレア:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当 杉江 昌子:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当 | |
| キーワード | 学生スタッフ | 多言語イベント |
| | 準正課・課外 | 主体的な学び |
| 発表の概要 | <p>京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、準正課の学生主体の活動として、英語ディスカッションをはじめ、外国語学習や異文化理解を目的としたイベントを幅広く実施している。定期開催するロシア語・ドイツ語・フランス語などの多言語会話イベントは、対象言語や文化に関心をもつ学生が集い、交流しながら学び合う場となっている。本発表では、各言語イベントを担当する学生が、参加者との対話の進め方、自作カードゲームなどを用いたアクティビティ、運営上の工夫など、具体的な実践を紹介する。また、メンバー自身の「言語が好き」「もっと学びたい」という思いがイベントの企画・実施にどのように反映されているかにも触れる。さらに、活動への関与を通して生まれた意識や学習意欲の変化を学生の視点から報告し、多言語イベントでの運営経験が自己成長へつながったプロセスを、準正課活動の実践例として共有する。</p> | |

20. 同志社大学

| | | |
|-------|---|--------------|
| テーマ | ラーニング・アシスタントの文理の垣根を超えた協働と学習支援の取り組み:大学院生による学習相談を中心に | |
| 発表代表者 | 趙 智英:同志社大学 学習支援・教育開発センター 助教 | |
| 連名発表者 | 磯川 雄大:同志社大学 大学院商学研究科 博士後期課程 3年生 藤田 萌々子:同志社大学 大学院文学研究科 博士後期課程 3年生 足立 莉子:同志社大学 大学院経済学研究科 博士後期課程 2年生 小林 裕:同志社大学 大学院生命医科学研究科 博士後期課程 2年生 | |
| キーワード | 学習支援 | ラーニング・アシスタント |
| | プレ FD | 大学院生 |
| 発表の概要 | 同志社大学ラーニング・コモンズでは、文系・理系を問わず多様な専門分野の大学院生がラーニング・アシスタントとして学習支援に携わっている。ラーニング・アシスタントは、学生からのアカデミックスキルズに関する基礎的な相談に対応するだけでなく、自身の専門性を活かした高度な学習支援も担っている。このような取り組みは、学生の正課外学習成果の向上を図るだけでなく、大学院生にとっても教育者としての実践的な成長の機会となっている。また、文理を越えた協働体制により、相談する学生・支援を行う大学院生の双方にとって、学際的な環境が形成されつつある。本発表では、このような同志社大学ラーニング・コモンズでの学習支援の取り組みを、大学院生による学習相談対応を中心に報告する。 | |

21. 大谷大学

| | | |
|-------|--|-------------------|
| テーマ | 大学生の思考力・表現力を高める言語技術オンラインプログラムの実践と課題 | |
| 発表代表者 | 筒井 洋一:大谷大学 非常勤講師 | |
| 連名発表者 | 北村 昌江:ランゲージ・アーツ研究＆アカデミー 代表 出町 卓也:英国 East Anglia 大学院大学院 | |
| キーワード | 日本人に適した言葉の技術の指導法 | 論理的・批判的思考力育成 |
| | 言語・非言語(ビジュアル)情報分析 | 自ら考え・判断し・行動する人づくり |
| 発表の概要 | <p>大学では、根拠を基にしたロジックや批判的思考力のための言語技術教育が一般的である。そのため、多くの学生は、大学の論理的思考やレポート作成、論文作成に自信が持てず、発表に対しても非常に消極的である。</p> <p>紹介する言葉技術トレーニングプログラムは、欧米諸国を日本人に合わせてプログラミングした。これを使って「2025 大谷大学『大学の学びを知る』の授業で、学生の思考力・表現力をどこまで向上させられるか挑戦した(15週中5週間)。その中で学生は、言語技術の有用性にどこまで気づけたのか、学習活動にどれくらい活用できたのかを報告し、社会が求める自律した学生の育成に必須な言葉の力とは何か、海外の大学でも要求される批判的思考力の育成について発表する。と同時に、生じてきた課題についても論じる。当授業では、言語技術のメソッドのオンライン化についても実践を行った。</p> | |